

ヨーロッパ近世經濟史

I

ヨーゼフ・クーリッセル 著

松田智雄 監修

諸田 實／松尾展成／柳澤 治
渡辺 尚／小笠原 茂 訳

東洋經濟新報社

監修者・訳者 紹介

まつだ ともお
松田智雄

1911年 東京に生まれる。

現在 図書館情報大学長、東京大学名誉教授。

もろた みおる
諸田 實

1928年 静岡市に生まれる。

現在 神奈川大学経済学部教授。

まつお のぶしげ
松尾展成

1935年 島原市に生まれる。

現在 岡山大学経済学部教授。

やなぎさわ おさむ
柳澤 治

1938年 東京に生まれる。

現在 東京都立大学経済学部教授。

わたなべ ひさし
渡辺 尚

1937年 東京に生まれる。

現在 京都大学経済学部助教授。

おがきはらしげる
小笠原 茂

1939年 山梨県に生まれる。

現在 立教大学経済学部助教授。

ヨーロッパ近世経済史 I

定価 6900 円

昭和57年7月1日発行

監修者 松田智雄

訳者 諸田 實／松尾展成／柳澤 治

渡辺 尚／小笠原茂

発行者 佐野佳雄

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京3-6518

© 1982 〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。 3033-3263-5214

Printed in Japan

監修者序

ヨーゼフ・クーリッschエル著『中世・近世一般経済史』第二巻「近世」は、ここに『ヨーロッパ近世経済史』という題名を掲げて翻訳公刊されることになった。その内容から言えば、これだけ精緻な事実関係を盛り、その上に経済史に関する問題意識とその研究史を展開している、充実した一冊の書物は、恐らく他に類例を見ないであろう。しかも、この浩瀚な著作を精確な日本語に翻訳することは、常識的な感想からすれば、ほとんど不可能に近い企てである。しかし、ようやく本書はこのように形を整えて、読者の前に提供されることになった。世界の国々について見ても、この本が完訳された例は、少なくとも私はまだ聴いたことがない。本書は、西洋経済史研究のための揺ぎなき古典として、それも、いくつかの名著のなかでも古典中の古典として評価される大作である。

原書を日本で手にした人々もけっして皆無ではなかったであろうが、少なくともその最初の頃に、まだ若年の学生であった私はこれを手にしている。それも全くの偶然のことであった。たまたまある書店のカタログで、v. Below u. Meinecke, *Handbuch der mittelalterlichen und neueren Geschichte* という書名を発見し、これこそは絶好の勉強の手引きであり、参考書であると思った。すぐに発注して、二か月ばかりたったもう夏に入ろうとするある日、書店の知らせて出向いてみた。そうすると、書店の机の上にうず高く本が積み上げてあって、しかも、これが注文の書物である、と言われた。計算書を見るとなんと八七マルクであって、当時の大学出学士の初任給の約二か月分であった。背中に汗が吹き出し、身体中が火照ってかっとな熱くなったのは、夏の始めの暑い日であったこともさきながら、その

衝撃のためであつた。結局、父に話してどうやら支払ってもらつたのである。私としては、*Handbuch* と記されていて単数であつたので一冊の本だと思つたのが、実は一五冊から成る叢書だったのである。そのなかに、この貴重な本書が含まれていたのは、当然のことでありながら、私にとっては驚異であり、今顧みて幸福であつたとしみじみ思う。

この叢書には、そのほかに、史学史、ゲルマン種族史、ヨーロッパ国制史、フランス・イギリスの憲法史、ローマ種族史、古文書学、歴史地理、貨幣史など、各分野にわたつて多彩な著作を収めている。著者ヨーゼフ・クリッシェルは、序言（第一卷〔邦訳、中世編〕）のなかで、最近（一九二七年）悲しくも他界されたドイツの傑出した歴史家ゲオルク・フォン・ペローの提案によつて、本書がこの「中世・近世史綱要」に採録されたことを深く感謝している。レニングラードの大学教授であつたクリッシェルにとつては望外の幸福であつたのかもしれない。しかし、本来ロシア語で書かれた草稿がクリッシェル夫妻の力によつてドイツ語に訳され、しかも、碩学ペローが監修するこの叢書に加えられ、ドイツ語を通じて広く世界各国に知られるに至つたことは、経済史学のためにまことに慶賀すべきことであつた。そのお蔭で、日本にもこの書物が輸入され、当時学生であつた私の手許に届けられることになつたのだ。そののち今日に至るまで、本書は私にとって北極星にも似た導きの星であつた。その頃おそらくほとんど輸入されていなかったであろうから、私が購入したのが出版後三年経つたにすぎない頃——私の本には一九三一年入手と記してある——のことだとすれば、私も数少ない日本の読者の最初のひとりに属したのであろうか。

本書は、ヨーロッパ各国にわたる各国経済史の概説であり、通史であるとともに、農業、産業構造、商業・信用の各領域について組織的に把握しており、とくに特徴的なのは、研究史・問題史的な叙述が厳密であり、詳細であることである。その頃の日本の研究者にとっては、何よりも、問題意識へと導く手段が欠落しているために、暗中摸索の孤独感に悩まされることが多かった。ところが、この本のなかには、いたるところに問題を提起し、これについての

研究史へ手がかりを与え、そして、かれ自身の見解をも示している。そのために、かれは経済史についての理論的に不可欠のカテゴリー、主要概念などを解説することには、極めて細かく注意を傾注していた。とくに教示されるところが多いのは、例えば、カエサル、タキトゥスの時期におけるゲルマン民族の土地所有形態・農業に関する研究史の整理の仕方（第一巻第一章〔邦訳、中世編〕）、近代資本主義の成立に関するゾンバルトなどの学説の紹介などであつて、かれは、プロテスタンティズムの倫理、ピューリタニズムの職業理念 *Berufsidee* の明確な把握による問題の意味への言及にあたつても、鋭い理解を投げかけている（第二巻第二章〔本訳書Ⅱ〕）。概説的な叙述と問題史の展開、この二つをただ一人の学究が見事に果したこの大著は、それ自身奇跡に近い偉業であり、公刊とともに古典に列せられたのも当然のことと云つてよいであらう。

さて、ここで触れておきたいのは、著者クリーッschel教授の胸中にひとつの悲哀が宿っているように思われることである。それは、序言（第一巻）において、文献についての注のなかで必ずしも精確で充分な引用用を提示できなかったのは、居所レニングラードでは、自分のドイツ留学中に使用した文献を参照し直すことができなかったためである、と記しているところに表現されているように感ぜられ、同情にたえないのである。事実、この書物を支えている文献的基礎は龐大でありかつ精緻を極めている。叙述自体がそのまま文献に関するこのうえない目録であり、しかも詳細な分類目録を付している。これを検索することによつて読者は必要にして充分な解題を与えられるであらう。ただの一冊の本でありながら、万巻の書を集約し、自らをしてその集中的表現たらしめている。かつて、私が西南ドイツの資本主義の初期的発展の路程を辿りながら、あの纖滅的な三十年戦争を否定的な前提とする端緒過程をどこに求めるか、考え抜いていたときのことである。私はクリーッschelのことばを天啓のように受けとり、触発された。そこには——本訳書一六二頁参照——三十年戦争にもかかわらず、カルフがヴュルッテンベルクの纖維工業の中心基

地となったことを特記しており、私を驚歎させたのである。カルフにはヴェルッテンベルクの領邦絶対権力の所産である織物取引〔特権的〕独占会社が強固に構築されていたにもかかわらず、自由な織工が「下から」の発展によって対抗し、自己販売量を高め、局地的市場圏のために生産する。この小商品生産者が、次第に自由に展開し、小規模なマニユファクチャー——本書に言う分散マヌファクトゥア——を芽生えさせる。カルフの中心基地としての繁栄の背後には、周辺農村地域における小商品生産者・小産業資本家の本来の「マヌファクトゥア期」を彷彿とさせる展開があり、しかも、それがクーリツシユルの明確な意識のもとに「農村工業」として描き出されている。本書のなかでたった一行記されたことを掘り起こすことで、これだけの展望の拡大へと導かれるのである。

本書の利用が読者に与える成果の可能性は、実に無限であると考えてよいであろう。このような古典中の古典は、唯一回的に与えられるだけであるかもしれない。

この大著の日本語への翻訳は、それだけでもかなりの難事業である。それにもかかわらず、翻訳を担当された諸氏の真摯な努力と、各氏が専門的研究者として十分な学識を備えられていること、とりわけ私共の若い頃とは異なつて、問題意識を豊かに抱かれていることによって、この事業はすぐれた成果を取めたと言えることができる。担当者諸氏とその全作業の取まとめに最大の努力を傾けられた諸田實教授に深い敬意を表するものである。

Bei jedem bedeutenden Unternehmen muß man die Hindernisse für Null erklären.

(あらゆる意義深い企てに際しては、障害などは無に等しいと思へ)

Goethe, *Annalen*.

一九八二年三月二日

松田智雄

序　　言

第二巻を刊行する場合、著者はたいいてい、第二巻が著者の希望しまた約束した時期よりも大幅に遅れて刊行されることに対して、材料が豊富であるためにその巻の分量が予定の紙数を大きく上回ったという理由をあげて、弁解するものである。このことはもちろん本書についてもあてはまる。上下二巻合せて印刷全紙五〇枚の予定が五五枚以上になったのである。したがって、それにもかかわらず第一巻の刊行後数か月ですでに第二巻が時機を得て完成したのは、ひとえに出版社の努力の賜といわねばならない。校正刷りをレニングラードへ送るのに要する時間を勘定に入れると、いっそうそういえるのである。しかしながら、第二巻の分量をこれ以上ふくらませないために、著者は多くの個所を短縮しなければならなかった。そのためにも、もちろん多くの問題はごく簡単にしか取り扱うことができなかったし、また特に最近世の農業史の叙述はもつとも重要な国々に限らねばならなかった。

一九二八年一月

ヨーゼフ・クーリッシエ

凡 例

一、本書は、Josef Kulischer, *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit*, München, 1928-29 の第二卷 *Die Neuzeit* (1929) の完訳である。分量の関係で I・II の二冊に分けて刊行され、I には、第三部第一編（第四編を、II には、同第五編、第六編および第四部を収める。原著書は、一九五四年に J・クチンスキーの序文を付してベルリンから、また一九五八年にはミュンヘンから、そのままの内容で第二版が刊行されているが、本訳書の底本としては、一九二九年の初版本を選んだ。

二、原著書第一卷 *Das Mittelalter* (1928) の完訳は、『ヨーロッパ中世経済史』（増田四郎監修、伊藤栄・諸田實訳）として、一九七四（昭和四九）年に刊行されている。本訳書では、これを「邦訳、中世編」と略記した。

三、原文で字間をあけて印刷されてある (*gespart*) 語には傍点を付し、*„* のついている語には「」を付した。また、ラテン語の部分については、とくに *„* を付した。本訳書の欄外の数字は、原著書のページ数である。

四、原文では 9 ポイントと 8 ポイントとの二通りの活字が使用されているが、その意味をくんで、本訳書でもその二通りの活字を使用し、8 ポイントの部分は特に一字下げて組むことにした。

五、「」でかこんだ部分は、訳者の責任において挿入したものである。そのほか、原文を正確に理解するうえで必要と考えた場合には、一つづきの文章を二つの訳文に分けたり、原文の一部分を——（*ダッシュ*）でくくったりしたところがある。

六、脚注は章ごとに通し番号をつけて各章末に一括して載せたが、別に説明を必要と考えた語には訳注を付した。原著者も第一卷（邦訳、中世編）の序言のなかでことわっているように、脚注における文献表示の仕方には、やや乱暴と思われる略記が散見されたが、そのまま表示した。邦訳のあるものは訳書を補った。その場合、訳文は邦訳のそれを参照し

たが、訳者の責任において一部変更したものがある。

七、原著書では、各編のはじめに「史料および文獻」が掲げられているが、本訳書では、索引とともに、IIの巻末に一括して載せることにした。ただし、第四部については、「史料および文獻」がない代りに、それに相当する脚注が各章に付いているので、そうした脚注を巻末に一括して載せることにした。「史料および文獻」と「索引」の作成方法については、それぞれの凡例を見られたい。

翻訳分担

I

序言	諸田
第三部	諸田
前文	
第一編 (第一章、第二章)	松尾
第二編 (第三章、第七章)	松尾
第三編 (第八章、第十一章)	柳澤
" (第十二章、第十三章)	諸田
第四編 (第十四章、第二〇章)	渡辺

II

第三部	諸田
第五編 (第二一章、第二三章)	諸田
第六編 (第二四章、第二五章)	諸田
第四部	
前文	
第二六章、第二七章	諸田
第二八章、第三四章	松尾
	小笠原

略 記 号

- Am. Hist. R.* = *American Historical Review*.
Arch. soz. Ges. = *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*.
Arch. Sozialw. = *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*.
Arch. Weltw. = *Weltwirtschaftliches Archiv*.
Fortn. Rev. = *The Fortnightly Review*.
Gierkes Untersuch. = *Untersuchungen zur deutschen Staats- und Rechtsgeschichte*,
 hrsg. von v. Gierke.
Hist. Viert. = *Historische Vierteljahrschrift*.
Hist. Z. = *Historische Zeitschrift*.
Jahrb. Nat.-Ök. = *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*.
Mém. Acad. roy. de Belg. = *Académie royale de Belgique, Classe des lettres
 et des sciences morales et politiques, Mémoires*.
Mitt. Inst. öst. Gesch. = *Mitteilungen des Instituts für österreichische Geschichts-
 forschung*.
Münch. Stud. = *Münchener volkswirtschaftliche Studien*, hrsg. von Brentano und
 Lotz.
Rev. d'hist. écon. = *Revue d'histoire économique et sociale*.
Rev. hist. = *Revue historique*.
Rev. quest. hist. = *Revue des questions historiques*.
Rev. synth. = *Revue de synthèse historique*.
Schm. Forsch. = *Staats- und sozialwissenschaftliche Forschungen*, hrsg. von
 Schmoller bzw. von Schmoller und Sering.
Schm. Jahrb. = *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft*,
 hrsg. von Schmoller (*Schmollers Jahrbuch*).
Sitz. d. Bayer. Ak. = *Sitzungsberichte der Kgl. Bayerischen Akademie der
 Wissenschaften*.
Sitz. d. Preuß. Akad. = *Sitzungsberichte der Kgl. Preussischen Akademie der
 Wissenschaften*, Philosophisch-historische Klasse.
Sitz. d. Wien. Akad. = *Sitzungsberichte der kais. Akademie der Wissenschaften
 (Wien)*, Philosophisch-historische Klasse.
Viert. Soz. -u. W. -G. = *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*.
Z. f. Handelsr. = *Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht und Konkursrecht*.
Z. d. Sav.-St., G. A. = *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte*,
 Germanistische Abteilung.
Z. Soz.-u. W. -G. = *Zeitschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*.
Z. Sozialw. = *Zeitschrift für Sozialwissenschaft*.
Z. Staatsw. = *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*.
Z. Volksw. = *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*.

目 次 (第I巻)

監修者序	松田智雄	i
序 言	ヨージェフ・クーリツシエル	v
凡 例		vii

第三部 近 世 (一六世紀より一八世紀まで)

經濟生活の一般的性格	三
------------	---

第一編 人口・消費	九
-----------	---

第一章 人 口	九
---------	---

さまざまな地方の人口増加。都市と農村。婚姻、出産、死亡率。非衛生的な生活状態。戦争と伝染病。三十年戦争とその結果。それについての諸見解。戦争後の困窮。伝染病の衰滅。移住。イタリア人、ユグノー、ベルギー人。ヨーロッパ外への移住。人口政策。

第二章 消 費	四〇
---------	----

さまざまな食糧品と飲料の消費。新しい嗜好品。コーヒー、茶、ココア、煙草。コーヒー

―店。フォーク、ナイフ、皿。下着、レース、時計、鏡。街路照明。

第二編 農業と農地制度

三

第三章 農業における革新

三

イギリス、フランス、ドイツにおける農業への関心。その結果。ネーデルランドにおける農業の躍進。シュヴェルツの報告。イギリスにおける成果。A・ヤングの旅行。一八世紀中葉までの、および同世紀末のフランスの農業。A・ヤング。地域による差異。他の報告。一八世紀末のドイツの農業。新しい試み。農業と農場領主Ⅱ農民関係。農地制度の一般的性格。

第四章 イギリスの農地制度

六

牧羊業への移行とそれへの反対。一六世紀の囲込み、その範囲と性格。一七世紀。一八世紀の囲込み。それと新しい栽培方式との関連。囲込みと国家の政策。囲込みの進展。農民層に対するその効果。

第五章 フランスの農地制度

一〇

栽培地の拡大。共有地の分割。落穂拾いの権利、共同放牧権、相互放牧権。荘園領主制。土地保有の分布。農民の保有権。領主権と領主的諸負担。農民の経済状態。

第六章 ドイツの農地制度

二四

荘園領主制と農場領主制。西ドイツの農地制度。バイエルンの荘園領主Ⅱ農民関係。東部の農場領主制。三十年戦争前および後の農民の保有権。農民追放。東部における農民の地位。

第七章	その他の地域の農地制度	三六
-----	-------------	----

第三編	工業制度	四一
-----	------	----

第八章	重商主義時代の営業政策	四二
-----	-------------	----

都市の営業政策と国家の営業政策。市場の拡大。関税政策。フリードリヒ大王の営業奨励。都市と農村。工業経営の諸形態。手工業と問屋制度。競争の出現とその制限。

第九章	家内工業（問屋制度）	五〇
-----	------------	----

手工業から家内工業への移行。問屋商人。生産の分化。仕上げ工と問屋商人へのその上昇。商人。ツンフトと家内工業。家内工業の労働者層。農村の家内工業。その禁止。各国におけるその普及。労働者の経済的・法的従属。家内工業条令。リヨンの絹工業。カルフ毛織物取引会社。オーストリアの規制。国家的需要。軍需品納入とそれに関連した問屋制度の拡張。武器生産と鉱山業。鉱山業における問屋商人。金属販売に関する国家的契約。鉱山業におけるカンパニーとカルテル。

第一〇章	手工業	五五
------	-----	----

手工業と家内工業（およびマニュファクチャー）とのあいだの分業。手工業の性格の変化。非ツンフト的手工業者。ツンフト加入条件の困難化。都市間のツンフト・雇職人連合、特にドイツの場合。労働罷業。ドイツのツンフト制の国家的規則。

第十一章	（集中）マニュファクチャー	五九
------	---------------	----

マニュファクチャーと工場は当時いかに理解されていたか。監獄・救貧施設におけるマ

ニュファクチャー。商業的企業としてのその性格。ドイツの場合。フランスの救貧院。自由な労働力を伴ったマニュファクチャー。問屋制度の強力な普及に対比したその数の少なさ。マニュファクチャーはいかなる産業部門に存在したか。スイス。フランス。ベルギー。オーストリア。ドイツ。

第二章 重要な工業部門

イギリスの毛織物工業、その発展と組織。麻織物工業。綿工業の発生および捺染綿布の禁止。捺染。リボン織機と靴下編機。絹工業。レース編工業。鏡工業。そのフランスへの移植。出国移住の禁止。鉱山業と金属工業。技術。

第三章 労働者事情

労賃、その規制。学問の立場。現物給与制。原料のごまかし。労働時間。婦人労働と児童労働。児童労働の優遇。労働者の悲惨な状態（その実例）。恐慌。

第四編 商業および商業政策・植民地

第四章 ヨーロッパ諸国（イギリスを除く）の貿易・植民政策

一六世紀以降の貿易と貿易政策との激変。ポルトガルとポルトガル領植民地。スペインの貿易と植民地。独占の打破。オランダの貿易の発展。インド、バルト海、地中海における貿易。フランスの貿易と貿易政策。地中海貿易。インド。その他の植民地。

第五章 イギリスの貿易・植民政策

貿易の覇権をめぐるイギリスの闘争。イギリスにおける外国商人の終焉。自主的貿易政策。エリザベス治下の貿易。クロムウェルの航海条例。メスエン条約。フランスとの条約。

ロシアとの貿易。一七三四年の条約。アメリカ。東インド。

第一章 主要な商業都市

リスボン。セビリヤとカディス。カステイリヤの大市。フランスの諸港、とりわけマルセイユ。アントウェルペン、アムステルダム、ロンドン、リヴァプール。イタリアの貿易の衰退。リヴォルノ。ヴェネツィア。ジェノヴァ。ハンザとその衰退。南ドイツの諸都市。一六世紀におけるその繁栄。フッガー家。南ドイツ諸都市の没落。ネーデルランド人のドイツ移住者。ケルン。ニュルンベルク。フランクフルト・アム・マイン。ライプチヒの大市。ハンブルクの興隆。

三六

第二章 商品

新しい植民地産品。黒人売買、その成立と発展、その反対者。穀物貿易、とりわけオランダのそれ。イギリスの穀物貿易政策。ヨーロッパ内および植民地向け工業製品の輸出。密貿易。

三七

第三章 商業の諸形態

商品取引と銀行（手形）業務との結合。漸次的専門化。委託取引、運送取扱、自己取引。〔諸業務の〕経営内統合。卸売業と小売業。多様な商品の同時的取扱。商業における分業の発生。農村の商業。行商およびそれとの対立。大市取引。倉庫販売。簿記。その端緒とその発展。

三八

第四章 海外貿易会社

制規組合。株式会社の成立。東インド会社。株式会社の変質。海外貿易会社の貿易政策。その弱点。

三九

第二〇章 取引所および取引所投機

取引所の成立。「ベルゼ」なる語。ブリュージュ、アントワープ、リヨンの取引所。
 アムステルダム取引所の投機・取引所業務。ロンドンの投機（南海会社）とバリの投機（ジ
 ヨン・ロー）。ドイツの取引所。国家と取引所。

……… 翌

第Ⅱ卷 目 次

第五編 貨幣、信用および交通制度

第二章 貨幣制度と鑄貨制度

第三章 信用および銀行制度

第三章 交通制度

第六編 資本および資本主義

第四章 資本 本

第五章 初期資本主義

第四部 一七八九年から一八七〇年までの時代の全般

的概観

経済生活の一般的性格

第二章 人口

第二章 農業および農地制度

第二十八章 營業の自由への移行

第二十九章 イギリスにおける機械と工場の出現および工

場労働者

第三〇章 その他の諸国における工場制工業と工場労働

者

第三十一章 商業政策

第三十二章 商業における変化

第三十三章 交通制度

第三十四章 貨幣、信用および銀行

訳者あとがき

史料および文献

索引